

## 木米筆山水圖 解説

東京 長尾欽彌氏藏

識字陶工と呼ばれた青木木米が陶器の途に入つたのは、一般陶工の多くが父祖以來の家業を繼いで無自覺にその途に進んだのとは撰を異にし、朱琰の陶説に刺激せられ、齡而立、既に陶工の習練を積むべくは遅きに過ぐる時期であつた。故にその鏤心刻苦の程もさこそ

木米筆 山水圖款印

と察せらるゝと共に、終生を斯道に投入して他を顧みざる決意も牢固たりしものであつたであらう。木米の畫は世に喧傳するが、それは彼にあつては飽くまでも餘技に過ぎなかつたのであつてその多くに此幅にも見らるゝ埴埴之工の印記を好んで用ひてゐたことにも、彼の胸懷が偲ばれて奥床しい感がせらるゝ。玉堂の筆

意に倣うて大雅の骨氣を得たと云へば略木米の畫の特質を現はし得てゐるかと思はれる。實に木米の畫は彼に於ては餘技に過ぎなかつたにせよ、否夫故にこそ文人畫の眞義を體得し得たのであつて、化政天保の爛熟期にあつて能くこの蒼老の趣致を存してゐることは激賞に値するであらう。此幅は賞て藤田男爵家より、馬越家に轉じ、再轉現所藏者の秘襲する所となつたもので世に著聞する名幅である。渴筆を以て山容を劃し、淡濕の墨を施し、間々褐汁を混へる。松籟と水聲とに和し、無雜作に山徑に踞坐して琴を玩ぶ高士の姿には、木米その人を見るが如く、對看漫ろに爽涼の氣の人を襲ふを覺える。上に山陽が一詩を

著けてゐる。

聾米雖聾心不聾筆情釉法本相通秋山秋水清音足此事誰云馬耳風

この詩は山陽全集中の詩集卷二十三年代未考の部に收められてゐて、從つて山陽の著贊の時代、又木米の作畫年代も明瞭ではないが、何れは文政より天保へかけて彼の晩期の作とすることに多く誤りはあるまい。山陽詩集卷二十一に錄せられる一什

雲山（青綠山水）乞詩

雲叟耳聾心不聾情音焉得筆端聰紛々毀譽不到經營慘澹中

東京 長尾欽彌氏藏

とあるものの用字稍似る所あり、或はこの兩詩あまり年時を隔てざる時の作とも思はれる。曩に一言せる如く款記は聾米、印記は朱文方印二顆、一は埴埴之工、他は鷓鴣之職とある。この印章は彼の作品中にあつても尤作と認むべきものに用ひられてゐることが多い。

## 美術研究所時報

美術研究所に於て四月二十二日美術懇話會を開催、佐々木昌興氏蒐藏に係る彭城百川の作品約四〇點を展觀し、田中喜作氏の講話が行はれた。尙二十三日一般に公開した。

## 寄贈圖書

正倉院御物圖錄 第十一輯

山中定次郎傳

帝室博物館  
山中定次郎翁傳編纂會

京都大徳寺塔中眞珠庵所藏の半井家畫像

藤浪剛一氏

日本畫傑作年鑑

芳川 趙氏

夜江人作畫集 一帙

青霞會

Sculptural Forms in Terracotta from Chinese Tombs.

Toledo Museum of Art

書 道 八ノ四

學校美術 一三ノ四

美術世界 三ノ四

美術眼 三ノ四

みづゑ 四一一

美 育 一五ノ四

美術往來 九七

教育美術 五ノ四

新建築 一五ノ三

藝術資料 三ノ一〇

史迹と美術 一〇ノ四

藝術日本 四五

最高美術 八ノ四

史 苑 一二ノ三

美術 一四ノ四

文部時報 六四九、六五〇

汎工藝 一七ノ四

貨幣 二四一

工藝ニュース 八ノ四

燒もの趣味 五ノ四

アトリエ 一六ノ四

美術殿 七ノ三

美之國 一五ノ四

畫 觀 六ノ四

美術評論 八ノ一

茶 碗 一〇〇

日本建築士 二四ノ三

陶 磁 一一ノ一

建築史 一ノ二

塔 影 一五ノ四

史 學 一七ノ三

帝國圖書館報 三一ノ九、一〇

藝 苑 三

日本美術協會報告 五一

國際建築 一五ノ四

漆と工藝 四五一

Bulletin of the Detroit Institute of Arts, Vol. 18, No. 6

Bulletin of the Cleveland Museum of Art, Vol. 26, No. 3, 4

Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol. 34, No. 3

Bulletin of the Museum of Fine Arts, Boston, No. 220

Metropolitan Museum of Art, Sixty-ninth Annual Report